

2019年度学生による地域フィールドワーク研究助成事業

研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名：富山福祉短期大学 幼児教育学科
- ・所属ゼミ：藤井ゼミ
- ・指導教員：藤井 徳子
- ・代表学生：島崎 千智
- ・参加学生：山崎 陽菜

【研究題目】子どもたちの豊かな経験を保障する保育環境 ～子どもの主体性を育む園庭づくり～

1. 課題解決策の要約

近年子どもの育ちに関わる課題として自然体験の不足が顕著となりその重要性が再認識されている。豊かな自然に囲まれた富山で暮らす子どもたちにとっても同様である。県内の保育士の意識調査でも、自然保育の質・量ともに現状では不十分と考えていることが明らかとなっている。

保育所や幼稚園の園庭は園児が一番身近に自然と触れ合える場といえるが、秋田らの調査によると¹⁾、現在の日本の状況として、広い大きな園庭でグラウンドがメインという園庭と、もうひとつは、スペースは限られるけれども自然が豊かで築山があったり遊具も手作りだったり、いろいろな工夫がある園庭という二つのタイプに分かれていることが報告されている。そして、子どもたちの豊かな経験を保障するためには、環境の側に多様性が必要であることもわかってきた。実際、広いグラウンドがメインの「運動場」のような園庭では、子ども主体で多様な遊びを展開することは難しい。

そこで本研究では、子どもたちの豊かな経験を保障し、子どもの主体性を育む保育を目指し、学生と現職保育者の協働プロジェクトとして小杉西部保育園(射水市)の園庭つくりかえに挑んだ。

2. 調査研究の目的

1. 少ない予算でも、知恵と工夫で園庭をもっと多様な遊びの場になるようつくりかえる。
2. 本研究の成果物としてミニブック『園庭改造 AtoZ』を制作し、園庭調査や園庭改造の成果を園や自治体等に発信(フィードバック)することにより、保育者らの園庭や保育環境への意識を高める。
3. 大学と保育現場の協働プロジェクトとし、学生にとっては、保育現場に参画し、実践を通して学ぶ貴重な機会となるよう、また保育園側にとっても、学生の視点や気づき、発想から学びあえる機会となるよう、協力して取り組む。

3. 調査研究の内容

- 7/19(金) 石動青葉保育園(小矢部市)園庭および保育見学
- 7/30(火) 小杉西部保育園(射水市)園庭調査
- 8/5(月) 小杉西部保育園職員研修「園庭でできる自然遊び」
- 9/18(水) 三者(小杉西部保育園職員、富山興業野原さん、短大学生)園庭会議
- 10/18(金) 小杉西部保育園職員研修「園庭改造プランを練り上げる」
- 10/29(火) 園庭プラン決定
- 12/17(火) 園庭改造開始 掘削作業
- 12/21(土) 築山の土搬入

12/23(月)～ 築山踏み固め作業

12/25(水) 園庭遊具贈呈

4. 調査研究の成果

4.1 石動青葉保育園「里山のような園庭」

石動青葉保育園の園庭は、今まで見てきた園庭とは大きく違っていた。ここは小矢部市内に13園ある幼稚園・保育園のなかでも最小の小ぶりの園庭なのだが、手狭な感じはまったくなく、むしろ園庭というよりも里山そのものだった。いくつもの築山が重なり、地面は凸凹していて、ちょうどいい具合に草で覆われている。子どもたちがいつも裸足で駆け回って遊ぶおかげで、雑草が踏まれて、草取りの苦労もないそうだ。園庭のいたるところに木々が茂り、雨や夏の強い日差しを遮ってくれている。初めて見学に行った日も強い雨が降っていて、少し残念に思いながら園に向かったのだが、行ってみると思いがけずたくさん子どもたちが園庭で遊んでいた。園庭の真ん中に小川が流れていて、子どもたちは笹舟を流したり、流れの中に入ってずぶ濡れになっていたり、池のほうで生き物を探していたりと、水という素材が遊びの多様性をさらに高めていることがわかる。ここでは子どもたちは、水・土・砂・木・石・動植物という自然(素材)と触れ合っ、「好きな場所で」「好きな遊びを」「好きなだけ」遊びこむことが保障されている。



図1. 石動青葉保育園園庭

4.2 大学・保育園・民間の協働

小杉西部保育園園庭は大きなグラウンドのエリアと、そのむこうに築山、砂場、子どもサイズの木製の小屋「ちびっ子ハウス」がある。園庭の周辺部には園庭遊具が並んでいる。ただ近年は猛暑日が増え、熱射病対策も大変で、木陰などが無い運動場型の園庭では「危険な暑さ」となり、子どもたちを安心して外で遊ばせられなくなってきた。小杉西部保育園では今年度は園庭をテーマに職員研修を重ねてきたところで、本研究事業がとても良いタイミングで重なり、また園庭や園庭改修に詳しい富山興業(株)野原謙さんにもご協力いただけることになった。こうして保育園、企業、大学の三者協働体制が整った。最初のミーティングまでに、学生チームは、全国のいろいろな園庭や園庭改造の事例を調べて、自分の理想の園庭のスケッチや写真などを持ち寄り、野原さんや園の先生方にご覧いただいた。ただ、たくさんの「これがほしい」「あれがやりたい」というアイデアは出てきたものの、それらをどうやって目指すゴールの形にまとめていけばいいのかわからなくなっていた。野原さんからは、これまでに手掛けてこられたいくつもの県内の園庭改造の事例を紹介していただいた。上記の石動青葉保育園の園庭も野原さんがご担当されたものである。たくさんのアイデア出しに終始していた私たちに野原さんがくださったアドバイスは「園庭に何がほしいか」ではなく、「子どもにどんな経験をしてほしいか」と考え、そこがはっきりしたら必要なものが見えてきますよ」という言葉であった。一気に考える視点が明確になり、必要なモノやコトがクリアになってきた。園の先生方も、これまでの園庭研修から、「木登りができるといいね」「畑と水場が遠いから、もっと近くで水が使えたら」「どろんこ遊びをもっと手軽にやりたい」など、もっと子どもたちにとっても保育者にとっても楽しい園庭につくりかえたいという想いが強くなってきていた。そうやって先生方と練り上げた園庭改造プラン(図2)を野原さんがさらにブラッシュアップしてくださり(図3)、新しい園庭プランが完成した。園庭プランには、ウッドデッキやピザ窯、ハーブガーデン、小川、池など楽しそうなものがいっぱい詰め込まれていた。しかし野原さんのアドバイスによると、園庭改造は一気にやって終わるというよりも、毎年少しずつ少しずつ変えていくほうがよいことがわかった。予算の問題もあるが、子どもたちの遊ぶ様子を見ながら「今度はあそこを〇〇しよう」「ここはもっと△□のほうがいいね」と、子どもたちの実態に即して改造していけるからである。そこで今年度は、たくさんの土を搬入して築山を3つ増築し、地面を凸凹にすることとした。

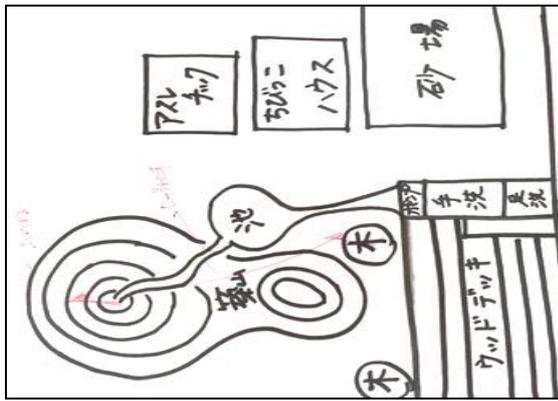


図 2. 当初の園庭プラン

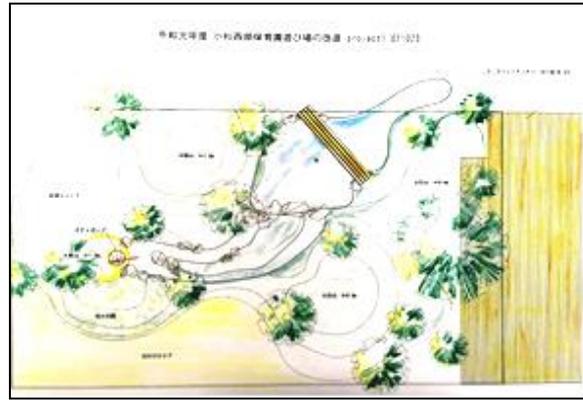


図 3. ブラッシュアップした園庭プラン

4.3 園庭改造

そこで私たちが考えた具体的な改造ポイントは以下の3点である。

①里山のように、築山をいくつも重ねて地面をでこぼこにする

園庭にはこれまでにすでに高さ 120cm 程度の築山が一つあったので、それよりも高い 160 cm の山を一つ、さらにその周りにも小さい山を二つ作って山々を繋ぐことになった。その場所には畑があったので、今後のことも考えて、一度築山ができる予定の場所を掘り起こして石を取り除き、畑も移動させることにした。この作業には本学1年生にも協力してもらった。一輪車で何度も土や石を運ぶ作業は重労働であった。また 160 cm の築山を作るための測量も体験させていただいた。測量と、測量のための杭打ちである。専用の測定器をのぞき、木槌を振り下ろして杭を打ち込んでいくという、めったにできない体験をさせていただいた。

②「高いところにのぼる」「揺れる」といった、ちょっと怖かったりドキドキしたりといった「挑戦する」という経験ができる場を作る

石動青葉保育園の子どもたちは木登りが大好きである(図4)。大きなサルスベリの木には、園長先生が「この木のとっぺんまで、子どもたち登らせてやりたいなあ」と願って、依頼を受けた野原さんが一年がかりで探し出したという抜群に枝ぶりのいいスギの木が添えられているので、その枝に足をかけて子どもたちはサルスベリの木のとっぺんまでどんどん登っていく。初めて見たときはとても心配したが、園長先生に「あんな高いところまで登ろうとする子は落ちないもので、落ちるような子はもっと低いところで落ちるし、そんな高いところまで登ろうとしない。」と教えていただき、腑に落ちた。確かにその通りで、「あぶないからさせない」というのは、本当に子どものことを考えた保育とはいえないことに気づかされた。



図 4. 木登り

小杉西部保育園の園庭でも「高さ」や「揺れ」といった、ちょっと怖い、ドキドキするような経験ができるとういと考え、園庭で一番大きなどんぐりの木に、縄梯子を吊るすことにした(図5)。ロープワークに詳しい兼崎亜紀子さん(富山森のこども園 ツリーイングインストラクター)にご指導いただき、森で集めた小枝をのこぎりでちょうどいい長さに切りそろえ、それをロープで結びにしてくくりつけていく。結び自体はシンプルで簡単そうに見えるが、ねらった高さで枝が留まってくれず、なかなか等間隔のはしごにならない。何度もやり直してようやく完成した。途中はしごに体重をかけて、安全性を



図 5. 縄梯子

確かめながら作っていった。「危険がないか、まず大人が試しておきましょう」と、園の先生がはりきってどんだんのぼって、はしごの上の木の枝まで登って、ずいぶん高いところからこちら

を見下ろして楽しそうに手を振ってくださる姿に嬉しくなった。ここにもう一工夫、「怖くて登れない子が登りたくなるように」と、赤いベルを縄梯子の上に取り付けた。さらに、ハンモックと木のブランコを、このどんぐりの木と周辺の木に吊るした。

③ちびっ子ハウスエリアには、ちびっ子ハウスがあるだけで周辺に何もないので、そこで遊びや人間関係が広がるような仕掛けをする



図 6. 木製ベンチ

ちびっ子ハウスは、東屋と呼べるような木製の小屋で、ヘチマのグリーンカーテンを這わしたりプランターを周囲に並べたりしていたが、その程度であり遊びが繰り返されているようではなかった。そこで、ちびっ子ハウス周辺でもっとままごと遊びが楽しくなるように、木製ベンチを手作りすることにした(図6)。これも石動青葉保育園でヒントを得たもので、軽いシンプルなコの字型ベンチは、ベンチにもテーブルにもなり、子どもが自分で持ち運んで好きな場所で遊ぶことができる優れたものである。設計図を書いて、木材選びから行い、材料を買い揃えた。持ち運びしやすいようにできるだけ軽くしたり、座った時に安定するようやすりで削ったり角をまるくしたりさまざまな工夫をした。そうやってなんとか一つベンチを作り上げた。

ほかにも、木製キッチンや調理器具、子ども用のほうき、ちりとり、デッキブラシなど、子どもたちの遊びが広がっていくように、また手にとって遊ぶときにも、遊び終えて片付けてそこに置かれているときにも、シンプルな実用性と美しさを備えてあることが大事であると考えて、自然素材を使い、本物の質感が感じられる遊具を選定した。また子どもたちもこれから一緒に園庭改造作業に楽しく参加できるように、一輪車やワゴン車も用意した。子どもたちにはちょうど12月25日に贈呈することになり、まさにクリスマスプレゼントとなり、子どもたちは大変喜んでくれて、さっそく遊び始めた。まだ踏み固められていない築山でドロドロになることも厭わず、友達と一緒にワゴン車を押ししたり引いたりしながら何度もできたばかりの築山ロードを駆け回る子たち(図7)。木のブランコでターザンのように揺れている子。縄ばしごの高いところまでのぼった子はハンモックの子たちに手を振っている。初めて乗るハンモックで最初は「2人ずつだから並ぼう」と言っていた子どもたちが「3人乗れるかな」「4人はどうかな」と実際に体験してみたら「3人までは大丈夫」と自分たちで考えてルールを決めていた姿が印象的だった。ハンモックの中で友だちとの触れ合いを楽しんだり(図8)、待っている友だちがいるから代わろうと友だちのことを考えたり、友だちとの関わりも遊びの中で学んでいた。またちびっ子ハウスでは、キッチンやベンチで、ままごと遊びがにぎやかに繰り返されていた。今まで何もなく、子どもたちの遊びが始まっていかなかった場所だったところで、今たくさんの遊びが生まれている。自分で手作りしたり、選んだりした遊具で子どもたちが楽しそうに遊ぶ姿は、本当に嬉しいもので、大きなやりがいを感じるとともに、「春には築山にどんな種を蒔こうか」と、子どもたちの遊びを見ながら次のつくりかえを考え始めている自分がいた。今後も遊具や築山で遊びが展開し、子どもたちが外遊びを更に楽しいと思える園庭に変わってほしい。



図 7. 築山で遊ぶ



図 8. ハンモック

5. 調査研究に基づく提言

「子どもは何を経験しているのか」という視点

このことは園庭に限らず、保育のどの場面においても重要な視点であると考えます。目の前の事象に囚われずこの視点を意識することで、本質や優先すべきことを見失わずに、保育を高めていくことができます。

子どもにではなく環境に働きかける

今回園庭が変わると、子どもたちの遊びが質的・量的に変わっていくことを実感できました。園庭だけでなく園舎のなかも、そして保育者自身も子どもにとっての環境といえる。

ゴールよりもプロセスそのものに意義がある

よりよい園庭をつくるという目標にむかって、話し合い、共同作業を行うというプロセスそのものに大きな意義があるといえる。同僚と何度も話し合いを重ねることで、わかっているようでわかっていた互いの保育観を共有できるようになり、また作業を通して園庭により愛着がわき、子どもたちの喜んで遊ぶ姿にやりがいを感じる事ができる。

大学と保育現場の協働

保育実習では、実習生という評価を受ける立場であるため、大きなプレッシャーを感じてしまいがちだが、今回のような共同作業や話し合いは、とても楽しいと感じた。「指導者と実習生」とは違う関係性の中で、保育について先生方とコミュニケーションを交わすことで、先生方は日頃の保育での困りごとなどをお話ししてくださり、また私たち学生の思いやアイデアにも真摯に耳を傾けてくださった。今後も、こういう機会を設けて、大学と保育現場が協働することによって、保育の質向上へと繋がっていくことを期待する。

6. 課題解決策の自己評価

本事業では、園庭改造という、生涯何度も携われるものではない貴重な機会に携わることができた。そして実際に園庭を変えることによって、子どもたちの遊びの質が変わっていくことも確信できた。自分たちで素材から吟味して選び、手作りした遊具はどれも格別の思いがこめられたものとなり、子どもたちが喜んで遊ぶ姿はひと際愛おしく、やりがいを感じる事ができた。4月からは保育士として働くので、自然保育を積極的に取り入れ、本学の教育目標「つくり つくりかえ つくる」を職場でも実践していきたい。

7. 謝辞

園庭改造という、人生で何度もできることのないプロジェクトに取り組むことができたのは、これから保育者になる私たちにとってはまたとない経験であり、幸せなことでした。プロジェクトの始まりに、石動青葉保育園の園庭や保育を見学させていただいたおかげで、プロジェクトを通して「子ども主体」という軸がブレることなく、意識して取り組むことができました。小杉西部保育園では、多忙な保育現場にもかかわらず、私たちのプロジェクトを快く受け入れていただき、さまざまな場面でご支援ご協力いただいたことを本当に感謝しています。また富山興業ご担当野原さんが私たちの園庭改造の夢を形にしてくれました。たくさんの人たちが協力することで、未来を生きる子どもたちの毎日が豊かになっていくことを実感できたのは、私たちの大きな喜びとなりました。どうもありがとうございました。

参考文献

- 1) 秋田, 辻谷, 石田, 宮田, 宮本, 園庭環境の調査検討－園庭研究の動向と園庭環境の多様性の検討一, 東京大学大学院教育学研究科紀要, no.57, 2017